

谷 豊信 九州国立博物館 学芸部長 志賀 智史 博物館科学課 進村 真之 展示課

1. 概要

1-1 参加の体制

九州国立博物館は、国（独立行政法人国立文化財機構、以下独法）と福岡県（福岡県立アジア文化交流センター）が連携協力して事業運営を行っている。研究職・一般職とも独法職員と県職員がおり、経費も独法と県が出し合っている。宮城県の文化財レスキューには独法と県が協力して対応することとし、独法・県双方の研究員を派遣することにした。

最初の派遣人員が仙台入りしたのは6月12日（日）、最後の派遣人員が仙台を離れたのは7月23日（日）であった。この間、6名の研究員（独法職員3名・県職員3名）が8回宮城県に赴き、延べ48日間文化財救出にあたった（移動日は含まず）。現地本部詰めが3名、現場対応が3名であり、現場対応の内2名は2回ずつの宮城県に赴いた。

この6名の参加者のうち、6月20日（月）から6月29日（水）まで、現地本部詰めに参加した博物館科学課の志賀智史（独法職員）と、7月3日（日）から7月9日（土）および7月17日（日）から7月23日（土）と2度にわたり現場対応に参加した展示課の進村真之（県職員）の報告を紹介する。

1-2 経費調達

上述の組織形態のため、派遣人員の出張旅費は、職員が所属する独法と県が、それぞれの予算の中から捻出した。

1-3 救援委員会のあり方についての評価と指摘すべき点

救援委員会は、国立博物館、文化財研究所など国の機関（独法も含む）のほか、文化財保存修復学会、全国美術館会議など性格の異なる団体からなる組織であったが、各団体がそれぞれの長所を発揮し、有効に機能したと考える。

しかしながら救援委員会は独自の予算をもつ組織ではなく、活動資金は寄付金・義援金や参加団体の持ち出しに頼らざるをえなかった。災害に備え、一定の資金をプールしておく制度があれば、委員会の活動はより円滑になったものと思われる。

一部の参加者から、多数の人員が交代で参加したため、引き継ぎが十分でないケースがまま見られたという報告を受けた。できれば一つの地域のリーダーは同じ人が長く担当するのが望

ましいが、担当者に過度の負担を強いることになり、難しい問題である。

1-4 震災時文化財レスキュー活動のあるべき形態

地震などの大災害はいつ起こるかわからない。将来、東北地方の文化財レスキューが一段落することとなっても、現在の救援委員会の枠組みは残し、災害時にはただちに協力体制を確立することができるようにしておくことが望ましい。また災害直後に委員会が迅速に動けるよう、すぐに使える資金をプールしておく制度を確立することが望まれる。

今回の教訓を生かし、被災文化財に対処する実践的マニュアルを作成し、関係者の研修を行っていく必要があると考える。また実働チーム報告で指摘されたことであるが、地元の人々との協力が重要である。とくに現場作業で、高度な技術を要しない作業には地元の方々に参加していただくことで率が上がる場合もある。その場合、参加者に適切な謝金を支払うことができれば、文化財レスキューは精神面のみならず、ささやかながらも経済的にも被災地復興に貢献する事業となりうるであろう。

谷 豊信

2. 実働チーム報告（1）

2-1 具体的な作業内容

私は現地本部（マネジメント）の担当で、6月20日（月）～6月29日（水）の10日間任務に当たった。宿泊地は仙台駅周辺で、現地本部のある仙台市博物館までは徒歩40分の距離であった。

現地本部は、責任者1名（東京文化財研究所職員）、現地本部員1名（国立博物館職員）、アルバイト1名の合計3名で構成されていた。現地本部の設置後約2ヶ月を経過し、救援作業も軌道に乗っており、現地本部も比較的落ち着いていたように感じられた。

救援現場の作業者は、朝博物館に集合し公用車に乗り合わせて現場に向かい、作業終了後に再び現地本部に戻って解散という形であった。

私の参加した10日間のスケジュールは凡そ以下の通りで



仙台市博物館内に設けられた現地本部（引っ越し前）

あった。

- ・ 6月20日（月）
福岡から仙台へ移動。16:00 仙台市博物館へ到着。17:30
～ミーティング。～ 19:00。
- ・ 6月21日（火）
7:15 資材、機材の積み込み。7:30 出発の見送り。引き継ぎ。
スケジュール作成。資材、機材の調達。～ 19:00。
- ・ 6月22日（水）
7:15 資材、機材の積み込み。7:30 出発の見送り。引き継ぎ。
スケジュール作成。資材、機材の調達。～ 19:00。
- ・ 6月23日（木）
7:15 資材、機材の積み込み。7:30 出発の見送り。スケ
ジュール作成。資材、機材の調達。18:00 ミーティ
ング。～ 19:00。
- ・ 6月24日（金）
7:15 資材、機材の積み込み。7:30 出発の見送り。スケ
ジュール作成。資材、機材の調達。～ 19:00。
- ・ 6月25日（土）
9:00 現地本部引っ越し。～ 17:00。
- ・ 6月26日（日）
9:00 現地本部引っ越し。～ 17:00。
- ・ 6月27日（月）
9:00 スケジュール作成。資材、機材の調達。17:30 ミー
ティング。～ 19:00。
- ・ 6月28日（火）
7:15 資材、機材の積み込み。7:30 出発の見送り。引き継ぎ。
スケジュール作成。資材、機材の調達。13:00 瑞鳳殿と昭
忠塔の調査。～ 19:00。
- ・ 6月29日（水）
仙台から福岡へ移動。

現地本部での業務の大半は救援計画・予定表の作成であった。宮城県の担当者からの情報を元に救援場所の事前調査を行い、現地本部責任者が場所毎に救済文化財、日数、人数、保管場所、移動に必要な車の台数、必要資材等の入った救援計画を作成する。現地本部員は、その計画を予定表に入力し計画を確認すると共に、資材の準備や諸事務手続きを行っていた。作成した救援計画・予定表は、月曜と木曜の救援活動終了後 17 時 30 分頃に行われる関係者のミーティングでの資料となる。ミーティングではスケジュールの確認、検討、救援作業の進捗状況の報告等が行われ、それを受けて計画の修正を行い、確定した予定表を関係者にメールで送付する、といった内容である。

私の参加した期間は、救援現場が車で片道 3 時間かかる場所であったため、出発時間が早めに設定されていた。

救援現場は 1 日 1～4 箇所、合計 20 人ほどが参加していた。現地本部での作業が少なくかつ救援現場で人員が足りない場合は、現地本部員 1 名も現場に行くことがあった。私が参加した 6 月後半は、宮城県内での救援活動が軌道に乗り、7 月に現地本部解散の可能性が考えられだした時期でもあった。そのため、連日救援計画・予定表の作成を行っており、救援現場に行き作業を行う機会はなかった。

それでも時間を見て、仙台市青葉区にある瑞鳳殿や昭忠塔の調査を行った。瑞鳳殿は仙台藩主伊達家の墓所で、震災では石灯笼や供養塔の 100 基以上が転倒し、石垣も崩落していた。調査時には、灯笼・塔の大半は元通りに組み上げられており、石垣も本格的な修復作業を行っている最中であった。昭忠塔は青葉城内にあり、東北出身の戦死者の霊を弔うために明治 35 年に建立されたものである。石垣の上にある羽を広げた鳶の銅像が無惨にも脚から折れ、崩落していた。これについては、応急処置としてブルーシートで覆い、結界も作っており、来訪者が近づけないように処置されていた。銅像は重量があり、屋外のため錆も進行しており、修理は大変な費用と労力が必要であることは容易に想像できた。この銅像は現在もほぼ手つかずの状態と伺っている。

その他、土日を利用して、仙台市博物館内での現地本部の引っ越しをおこなった。現地本部には、段ボールや梱包資材、マスク、作業着、長靴、ヘルメット、手袋など、レスキューに用いる諸資材、道具類、各方面との連絡、調整、資料作成に用いるパソコンが複数台あり、これらすべてを移動した。

2-2 救援活動参加の成果と課題（自身にとつての成果と課題）

九州では震災の直接の影響は無かったため、その情報はテレビや新聞等のメディアから得られたものが全てであった。おそらく、今回の事業に参加しなければ、私もそうであつたらう。

派遣当日は空路で仙台に向かった。仙台空港は海岸部であつ

たため津波で壊滅的な被害を受け、約1ヶ月間閉鎖されていた。当日はすでに再開されていたとはいえ仮設の部分も多く、壁には2メートル以上の高さの場所に浸水ラインが確認できた。空港の周囲には基礎だけの建物や折曲がった道路標識、砂に埋もれた耕作地など、震災による津波の被害には目を覆うばかりであった。震災後約4ヶ月経過しており、瓦礫などはかなり整理されていたが、所々に横転した車や船が認められた。一方、内陸部にある仙台市中心部に到着すると、建物やライフラインも通常通りに見え、復興支援の拠点であったためかいつも以上に人が多いようで、震災の影響を全く感じられないほどの状況であった。もちろん道路や歩道の部分的な陥没、建物の中には崩落寸前で中に入れられないものもあったが、それでも大半は普段



救援を待つ昭忠塔（仙台市青葉区）



石垣の復旧工事が進む瑞鳳殿（仙台市青葉区）

通り使用されているようであった。同じ震災でも津波を受けた地域とそうでない地域の被害の差を目の当たりにした。

現場での救援活動には直接参加できなかったが、話を聞いた後現場写真を整理したりする中で、災害発生前の日常的な備えや災害発生後の対処方法をより具体的に考えておく必要があることを痛感した。10日間という短い期間ではあったが、裏方ながら救援に少しでも役に立てたこと、また少しでも現地の状況を感じられたことは、今後の文化財の保全を考える上で、大変貴重な経験となったと考えている。

2-3 委員会のあり方についての評価と指摘すべき問題点

震災発生後約1ヶ月で委員会が設置されたことは適切な時期であったと思う。地域の文化財は、被災者にとって復興の精神的な支えになるため早急な救出が求められるが、震災発生直後はやはり被災者の救出、ライフラインの復旧が最優先されなければならない。

救援対象は指定文化財だけでなく未指定品なども含まれる点は非常に意義深い。未指定品の中にも、その地域を語る上で必要不可欠な資料もあり、一括した救援が望まれる。ただし、特に個人所蔵の文化財などは、把握されていないことも多く、救援活動を効率よく進めるためにも日常からの所在確認は必須であろう。

協力団体も国立系機関だけでなく民間団体や学会といった文字通り官民上げて構成されており、救援体制のフレームはほぼ完成したように見受けられる。これまでの関連機関・団体の地道な活動の成果であろう。協力団体の活動には得手不得手があるものの、これまでの震災では独自に活動していることが多く、団体としてできることの限界を感じつつあったと同っている。これら協力団体が委員会のもとで協力しあい、お互いの得意分野で力を発揮し、全体としてスムーズな救援活動を行うことができれば、より多くの文化財を効率良く救援、保全することができるだけでなく、団体の社会的な意味もより高まってくるものと思われる。今後は、このフレームの中がより良く機能するために、委員会解散後も協力団体同士がこれまで以上に日常から連携・協力し、様々な情報を共有しておくことが重要と考える。特に、水損文化財や火災の危険性のある文化財の救出は、災害発生直後の初期対応が重要であり、初期対応は遠隔地からの支援は受け難く、その地域内や隣接地域で対応するしかない。これら初期対応と委員会設置後の救援活動が、連続してスムーズに進むことが理想であろう。

2-4 震災時文化財レスキュー活動のあるべき形態（提言）

阪神淡路大震災以降、多発する大規模自然災害のたびに論じられていることではあるが、震災前の予防、震災後の救援、救

援後の修復と活用の三点に纏められる。

震災前の予防で最も大切なことは、日常から文化財の所在確認を行っておくことであろう。国や都道府県等の指定文化財については、所在の明らかなものも多いが、それ以外の文化財については把握されていることは少ない。把握されていたとしても、その記録が災害を考えて複数個所に保管されている例は少ない。文化財の所在が分かれば、ハザードマップに照らし合わせて危険な所在地を抜き出し、所有者に博物館などの安全な場所での保管を勧めるなどの対策が可能となる。万が一被災した場合であっても、所在が分かれば救援が迅速に進むことが予想される。また、行政の担当者自身の被災も考えて、周辺行政・団体との連携協力体制も日常から話し合っておく必要もあろう。

今回の震災は津波による被害が中心ではあったが、火災が発生した場合には一分一秒を争う状況である。こういう状況では消防団員や地域住民だけでのレスキューの可能性も十分考えられることであり、文化財の専門家以外の方々への日常の啓発活動や訓練が求められる。

震災後の救援については、紙・絹素材の文化財では48時間以内の初期対応の重要性が指摘されている。初期対応は、その地域内や県内の方が中心となることが予想される。被災文化財にどのように対応するかについてのマニュアルの作成や研修が必要であろう。マニュアルについては文化庁の文化財防災ウィールで概要が示されており、東京文化財研究所でも今回の震災で情報共有の研究会が行われているが、より実践的なマニュアルの作成や研修を日頃から行っておく必要があると考える。

救援後の修復と活用では、修復については専門性の高い分野でもあり、当然、修復費用も必要であろう。しかし、全てが高度な技術が必要なものばかりではない。状態により分類し、高度な技術が必要なものは専門家に、それ以外は、専門家の指導のもとアルバイトやボランティアにお願いすることも可能であろう。専門家による修理には必ず費用が必要である。修理費の確保は頭の痛い問題である。指定文化財であれば補助が得られるため何とかなるかもしれないが、それ以外の文化財についての修理費の捻出は難しいと言わざるを得ない。企業からの寄付を募り、基金を作るしかないが、すぐには難しいと言わざるを得ない。

比較的軽微なものの修理は、被災された方々の生活がある程度落ち着いてから地元で行った方がよいであろう。修復場所は、廃校になった小中学校を活用するのも良い考えである。修復が終わった文化財は地域の人々の精神的な支えとして、展示等での公開も必要であろう。

救援は、震災が小規模なものであれば、周辺地域からの協力で比較的迅速に進む可能性もあるが、今回のような広域の震災

では、それも難しいと言わざるを得ない。長期戦でもある。今後の震災時への対応も考え、日常から各教育委員会、団体、機関等の連携協力体制作りへの助言、研修の実施など、その対応や窓口になる組織、部門、団体が必要ではないかと考える。どのような体制で進めるかについては今後十分議論を行う必要がある。簡単にできることではないが、今後の文化財の保全にとってなくてはならないものであり、十分検討しなければならない課題であろう。

2-5 その他

現地本部については、設置当初約1ヶ月間は常駐者1名の体制で、現場の下見や資材の調達、スケジュール作成、調整など大変であったと伺っている。その後、2名体制になった頃から救援が軌道に乗り始めたこともあって、かなり落ち着いてきたようだ。私の参加した期間は丁度落ち着いていた時期でもあったが、実務的にも気分的にも2名以上の常駐は必要と感じた。

現地本部のあった仙台市中心部は、私が参加した頃には震災の影響もひと段落し、おおむね平常通り安全、快適に生活できる場所であった。しかし、救援現場には遠方も多く、車で片道3時間近くかかる場所も少なくなかった。往復の時間や運転による疲労、救援による疲労、救援の効率性を考えると、もう少し近い場所での宿泊や運転の委託などを考えても良いのではないかと思った。

救援に用いる資材については、水損資料が多いこともあって、段ボール箱よりもテンパコ（プラスチック製のコンテナ）が威力を発揮した。今回は、山形県埋蔵文化財センター等から使わなくなったテンパコの提供があったため、自前で揃える必要が無かったが、今後の救援活動には必須の道具であると思った。

志賀 智史

3. 実働チーム報告（2）

3-1 具体的な作業内容

私が派遣されたのは宮城県内で行われた被災文化財等の救援事業で合計2回である。最初の派遣は、平成23年7月3日（日）に本部の置かれた仙台市に入り、9日（土）に福岡に戻った6泊7日間であった。二度目の派遣は、7月17日（日）に仙台市入りし、23日（土）に帰福した6泊7日間であった。

・7月3日（日）

福岡空港から仙台空港への直行便はまだ再開されておらず、愛知県の中部国際空港経由であった。午後の早い段階で仙台市の南側、名取市に所在する仙台空港に到着した。夏とはいえ、東北は九州より若干涼しく感じた。テレビな

どで盛んに報道されたように仙台空港でも津波の爪痕は著しく、ようやく再開できるまでに仮復旧した状態であった。仙台空港は前年度の夏に一度、出張で利用したことがあり、緑に囲まれた素敵な空港との印象を持っていたが、その変わりようには驚きを隠せなかった。仙台市内への主要な交通手段であった仙台空港アクセス鉄道も大きく被災していたため、代替バスで仙台市内へと入った。途中、水田が広がっていた平野には、津波で流されてきた立ち木や自動車、本来空港に停められていた小形のセスナ機までもが、各所に放置された状態であった。高速道路出口付近では、高速道路無料化の証明書チェックのために渋滞が著しかった。

仙台市街地は、一部の建物が地震による被害を受けているものの、外観に目立った被害は見受けられず、先ほどまで見てきた津波の被災地との大きなギャップに驚かされた。被災文化財等救援事業の本部は仙台市博物館の一部を間借りしていたが、十分な広さであった。奥には大量の資材が積み、手前のスペースでは本部の担当者が慌しく電話対応に追われていた。本部担当者および作業から戻ってきたメンバーより文化財救済の現場の状況を聞き、翌日以降の作業の綿密な引き継ぎを行った。現場はどこも瓦礫の中にガラス片が散乱したかなり危険な場所とのことであった。そのための装備として、作業着、軍足、安全靴、厚手のゴム手袋、ヘルメット、ヘッドランプ、防塵防臭マスクなどが準備されていた。

実際に翌日以降、現地での作業で、安全靴はガラスの散乱した現場を歩く際に必需品であり、厚手の手袋もガラス混じりの土砂を取り除く際に大いに威力を発揮した。博物館の収蔵庫など窓が無い前提で建てられた場所では、まだ電気が来ていないため、暗闇での作業もあった。その際にはヘッドランプが大いに活躍した。また、現地ではいまだ津波で打ち上げられた土砂とともに打ち上げられた魚が散乱している状況であり、腐敗し悪臭を放っていた。また、それをエサに大量のハエが発生しており、防塵防臭マスクが大きな役割を果たした。

引継ぎ後、その日の作業に参加したメンバー全員が揃って、週に一度行われる連絡調整会議が行われた。まだ実際に現地を見ていなかったため、報告される内容や用語に不明な部分が多かった。

・7月4日（月）

当日は時折、土砂降りとなるあいにくの雨であった。作業内容は、石巻市にある石巻文化センターからテンバコを運ぶことであった。翌日の東松島市野蒜地区の文化財収蔵庫の作業で使用するものである。途中、海岸沿いに建つ石巻文化センターまでの道路は津波によって甚大な被

害を受けており、多くの箇所が冠水、陥没していた。また、センターの周辺には瓦礫や津波で廃車となった車がうず高く積み重なっていた。復興関係の車両などで、交通量は多いものの、電気が復旧していないため、信号機は機能しておらず、遠方の各県より派遣された数多くの警察官が交通整理を行っていた。

到着した石巻文化センターの1階の事務室は津波により完全に破壊されており、大量の事務機器、書類が散乱したままの状態であった。保管されていたテンバコ約120箱を公用車に積み込み、野蒜地区の文化財収蔵庫へ向かう。収蔵庫の軒先にテンバコを下ろし、翌日の作業に備えた。

・7月5日（火）

東松島市の野蒜地区に所在する文化財収蔵庫の遺物救出活動を行う。この野蒜地区は震災後、しばらく交通、通信が完全に遮断され孤立していた地区である。文化財収蔵庫には縄文時代の国指定史跡里浜貝塚の遺物がテンバコに入れられて大量に収蔵されていた。津波により建物の扉や窓が破損したために、遺物の散逸を防ぐために壁には外側よりブルーシートが巻かれ、コンパネが打ち付けられていた。そのコンパネをはがすと、遺物を入れ整然と積んであったであろうテンバコが一部を残して倒壊し、床面には津波で運ばれてきた泥やゴミと遺物、遺物が入ったビニール袋が厚く堆積していた。平屋である建物の天井近くの壁には津波が届いたことを示す水跡のラインがくっきりと残っていた。内部は暗かったために撮影用のライトを設置し、発電機からの電力で照明を行った。作業はまず、足元の堆積物を除去する作業から行われた。ただこの中には貝塚の出土遺物も多く含まれるために十分精査しながら選別し、遺物は昨日搬入したテンバコに詰めていった。堆積物の中には、どこからか流されてき



野蒜地区収蔵庫

たであろうアルバムや年金手帳なども含まれており、津波の凄まじさを強く感じた。

その時点では、倒壊を免れたテンパコはそのまま外に運び出せばよいかと考えていた。しかし津波によって中の遺物が持ちさられたのか、テンパコの中はほぼ空になっていた。救出した遺物は、東松島市の文化施設である奥松島縄文村へ搬入している。一日目の作業で全体の床面積の約三分の一が終了している。

・ 7月6日（水）

昨日と同様、散乱した貝塚の遺物と土砂の選別、搬出作業を継続する。空パンケースがさらに必要なことが判ったため、石巻文化センターより空パンケース 200 箱を追加で搬入する。建物内に残されていた本来、遺物の入っていたパンケースを全て屋外に搬出したために、作業は大きく進捗し、全体の 8 割が終了している。野蒜地区文化財収蔵庫の作業は翌 7 月 7 日（木）も継続され、全ての遺物を奥松島縄文村に搬入し、完全に作業を終了している。

・ 7月7日（木）・8日（金）

人員配置の関係により、私は野蒜地区での作業を離れ、石巻文化センターで作業を行った。石巻文化センターは被災前、地域の中心的な文化施設であり、大規模なホールを備えた 2 階建ての立派な建物であった。海岸縁に建つ石巻文化センターの 1 階は津波によって被災したものの、2 階の第 4・5 収蔵庫は津波の被害をほとんど受けず、収蔵品の一部が仮保管されていた。しかし、被災後、電気が来ていないため、収蔵庫内の空調どころか、換気を行うこともままならず、気温、湿度の上昇とともに収蔵品にカビが発生し始めていた。このため、収蔵品に発生したカビを除去した後、梱包し、多賀城市の東北歴史博物館の収蔵庫へと搬出する作業を行っている。作業終了後、仙台市博物館にて本部担当への引き継ぎ作業を行った。



石巻文化センター環境調査

・ 7月9日（土）

仙台空港から福岡へ戻った。九州国立博物館に戻った直後、宮城県での文化財救済活動の参加者募集があることを聞き、応募した。1 週間後、再び仙台へ向かうこととなった。

・ 7月17日（日）

福岡空港より大阪国際空港経由で仙台空港に入る。仙台市内はちょうど震災からの東北復興を祈念した「東北六魂祭」が行われていた。通りには人があふれ、震災前の夏よりもにぎわっていた。本部にて引継ぎ作業を行う。今回の作業では、最初の派遣で行った現場での作業を中心とする一次的なレスキュー作業ではなく、一旦、救出し仮保管された文化財を梱包、別の場所へ移動する作業が主であるとの説明であった。

・ 7月18日（月）

石巻市鮎川に所在する旧牡鹿町史編纂室の資料の救出を行った。鮎川は牡鹿半島の先端にあり、仙台市内より車で 3 時間ほどかかる場所である。資料は、同地にかつて所在した牡鹿町の町史を編纂する際に収集されたものである。これらの資料は文書類が中心であった。幸い、資料は建物の 2 階に保管されていたため、床付近にあったごく一部を除き、津波の浸水を免れていた。ダンボール箱に梱包し、箱ごとの写真の撮影後、リスト作成を行ったが、総数約 300 箱に及ぶ膨大な量であった。4 トントラックに満載し、この日は一旦、仙台市博物館に保管した。



旧牡鹿町史編纂資料梱包状況

・ 7月19日（火）

昨日の旧牡鹿町史編纂室の資料を仙台市内にある東北福祉大学の芹沢銈介美術工芸館に搬入した。午後からは、東北大学埋蔵文化財調査室にて歌津魚竜館の洗浄済み資料の写真撮影、リスト作成を行った。また、埋蔵文化財調

査室の収蔵庫に仮保管してあった石巻文化センター所蔵の考古資料のうち、洗浄前のテンバコ約 220 箱分について、現状での写真撮影を行っている。資料は土砂と周辺の製紙工場より流出したパルプが付着したままであった。どのような被災をしているか判らなかつたため、取り扱いを極めて慎重に行う必要があつた。

・ 7 月 20 日（水）

亙理町の郷土資料館である悠理館で作業が行われた。個人宅に所蔵され、津波で被災した文化財が搬入されていた。これらの文化財については、被害の度合いも比較的少なく、すでに丁寧な洗浄が行われていた。書蹟、絵画、陶磁器などの内容、員数の確認を行う。救出時のリストを用いて照合しようとしたが、照合が不可能なものもあり、新たにリストを作成した。



個人所蔵資料リスト作成作業

・ 7 月 21 日（木）

石巻市サン・ファン館での作業であつた。すでに洗浄が終わっている女川町のマリナル女川の漁業関係の民俗資料、計 26 件を仙台市科学館へ搬出作業を行った。

石巻市サン・ファン館は施設が海岸部に建てられており、施設が港と崖の高台に分かれている。港の施設には 17 世紀初頭、支倉常長ら慶長遣欧使節がヨーロッパに渡つた際の船サン・ファン・パウティスタ号が復元、係留されていたが、マストが折れるなど大きな被害を受けていた。高台の施設に関しては津波の被害を免れており、別の施設から搬入された文化財の洗浄、乾燥などが行われていた。

被災当日に勤務されていた職員の方にお話を伺したところ、一度目の津波は高さ数十センチ、二度目は高さ 7～8m であつたとのことであつた。職員は全員高台に避難して、無事であつたが、数日は連絡も取れず、道路が冠水し外部にも出られず、完全に孤立した状態であつ

たとのことである。

・ 7 月 22 日（金）

旧牡鹿町体育館に仮保管してあつた民俗資料の搬出を行った。ここは、支援物資が保管される倉庫として利用されており、その一角に大量の民俗資料が保管されていた。搬出先は東北学院大学であり、大学にて洗浄作業を行うとのことであつた。

・ 7 月 23 日（土）

朝から仙台市博物館にて本部担当に引き継ぎを行った。当日はちょうど、震災で大きな被害を受けた仙台市博物館が再オープンした日であつた。同時に特別展「館蔵名品百選—開館 50 年 コレクションの粋—」のオープニングの日であり、多くの市民でにぎわつていた。一部、再開した空港鉄道を乗り継ぎ、仙台空港より直行便にて福岡へ戻つた。

3-2 救援活動参加の成果と課題（自身についての成果と課題）

あわせて二度の救援活動に参加したが、最初に派遣が決定した時点では現地の情報が極めて不足しており、どのような準備をすればよいのかがよく判らなかつた。幸い、出発前に東京文化財研究所の担当者からメールにて現地の詳細な状況を教えて頂き、また先に派遣されていた数名の九州国立博物館の職員から情報を得ることができたため、必要なものを揃えることが出来た。

私は考古学を専門としており、一般的な文化財については取り扱うことが可能であると考えていたが、津波で大きく破損したり、濡れたり、カビが生えたものがあり、どのように取り扱えばよいのか、非常に苦慮した。今後、こういった文化財の状況にあわせて処置にも対応できるよう自身のスキルを上げなければと痛感した。

また、津波によって被災した文化財はどのような物質が付着しているかわからない。私自身も、暑さのせいもあり、マスクやゴーグルをせずに現地での作業を行ったこともある。被災地では津波に運ばれてきた土砂による粉塵や散乱している大量の腐敗した魚、それをエサにし、大量発生したハエなどによって肺炎や結膜炎等の疾病が多く発生しているとの話もあり、一次的なレスキューを行う際には、十分な防備・安全対策を施して作業を行うべきである。またその後、洗浄等の作業を行う場合も同様に十分な対策を講じてから行い、児童・生徒に体験学習などとして参加させる様なことは避けるべきであろう。

3-3 委員会のあり方についての評価と指摘すべき問題点

私が参加していた期間、極めて円滑に作業を行うことができ

た。ひとえに本部の方々の細かな手配の結果である。その段取りを行った本部は大変な苦勞をされたと思う。実際に現地に入った際に必要な人員、装備、必要であろう作業時間のすべてが綿密に計算されており、安心して作業を行うことが出来た。作業に必要な物資が豊富にあったことも、円滑に作業を進める上で安心して行うことができた。次第に暑くなる時期であったため、昼食用の弁当が悪くならないようにクーラーボックスに氷を準備してもらい心遣いもありがたかった。また、細かい点ではあるが、日々の現場での作業で使用した作業着を自身で洗濯することなく、クリーニングに出すシステムも、ストレスなく現地での作業に集中できる一因となったと言えよう。

委員会の問題点としては、しいて言えば、現場の担当として参加している間に全体の流れが見えづらかった点であろうか。業務の都合もあり参加者が、ほぼ一週間単位の日程による区切りなので、細かな引継ぎが十分でないままのことが多かったと思われる。ほとんど新たに入った人々で作業を行った日もあった。日程的な制約もあり、難しいことであろうが、一つの現場に関しては一貫した担当者が行うことが理想であろう。

3-4 震災時文化財レスキュー活動のあるべき形態（提言）

時間も人的な余裕もないところから、本部を立ち上げ、レスキューの活動を軌道に乗せることは非常に困難なことであったと思われる。今回参加した中の作業には、瓦礫の撤去など必ずしも専門的な知識を必要としない作業も多く含まれていた。そういった部分において地元の方を雇用できる体制ができれば、作業をより円滑に進めることが出来、地元の方々にも有益なものになるであろう。

3-5 その他

今回の被災文化財等救援事業に参加させていただいて、私自身も多くのことを学ばせていただいた。現在、現地での一次的なレスキューがほぼ終わったとはいえ、これから文化財の洗浄、修復、復元など多くの作業が長期に渡って続くことと思われます。一日でも早く、被災の地が以前のように復旧することを心から願わんばかりです。

進村真之